

主人古光而已、其壁次三品話、嘗宿京之今熊野、山伏者某爲某女人、祈邪氣、女人口吐鐵釘、又吐出一物、乃楊枝、并眉造者、以其女人手書和歌、故紙而纏之、稍見其物、遂巡而從去、

〔仁勢物語〕下おかし大けいせいやありけり、略○中かく片時もはなれず、有わたるに、いたづらもの

になりぬべければ、終に知音はなるべしとて、このおとこ、いかにせん、吾かのさまよせたまへと、佛神にも申けれど、いやまさりてよせざりつ、なをわりなく、いとすげなうあひしらひければ、御楊枝かるたなどつ、み、かきつけて、もはやかはじといふせいもんをたて、なむあひける、

〔男色大鑑〕此道にいろはにほへと

やうく西日になつて、樽は口せず、轉かし、水風呂の湯もすて、久三もとりまはし賢く仕舞へば、女は噪しく木綿足袋をぬぎて、袂に入、銀の笄を楊枝にさしかへ、櫛も鼻紙袋にをさめ、紅の脚布を内懐にまくりあげ、上着の衣裏をかなしみ、首筋をとりのけ、木枝に掛置し、木地笠をとりぐに、いそぐや暮の面影、

〔男色大鑑〕七螢も夜は勤の尻

きのふは田舎侍のかたむくろなる人に、其氣に入相ごろより夜ふくる迄、無理酒にいたみ、けふはまた七八人の伊勢講中間として買れ、略○中楊枝つかはぬ、口をちかく寄られ、木綿のひとへなる肌着身にさはりておそろしきに、革たびの匂ひ籠りて鼻ふさげば、略○下

〔江戸總鹿子名所大全一名木〕楊枝同所麻布に有これも親鸞上人のさし給ふの、楊枝同所山中に有て、岩の中より生じたる木也、

〔類聚名物考調度〕十淨齒木

慈恩傳卷三、四ノ右、從此東行五百餘里、至鞞索迦國云々、其側又有如來六年說法處、有一樹高七十尺餘、昔因佛淨齒木棄、其餘枝遂植根繁茂、至今邪見之徒、數來殘伐、隨伐隨生、榮茂如本、今案に、淨齒木は即ち楊枝なり、國朝にも、古人宿徳の楊枝箸などの生付て、今大木となれりといふ